

論文

ピエール・エルバール『黄金時代』における 同性愛と家庭の両立

森 井 良

はじめに

ピエール・エルバール（1903～1974）はそのキャリアの後期に当たる1950年代から自伝的色彩の強い文学作品を立て続けにものした。なかでも1953年発表の『黄金時代 *L'Âge d'or*』は、自らの恋愛遍歴を多少のフィクションを交えて回想した私小説であり、そこには異性愛に取って代わるべき「幸福な愛」としての男性同性愛が率直かつ簡素な筆致で描かれている。エルバールにおける同性愛のテーマは、個別の作家研究のみならずフランス同性愛文学を対象としたより一般的な研究においてもしばしば取り上げられているが、いずれの論者も本作を彼の最重要作と捉えており、なかには当該テーマの文学史上画期的著作と見る向きもあるほどである。

作家自身のセクシュアリティのありよう、タブーに囚われぬ「快活で幸福な同性愛者」像、純粹かつ自然な欲望の語り——『黄金時代』にはエルバールの同性愛に特有の主題・問題が結集されているというわけだが、我々としては、そのうちの一つである同性愛と家庭の関係性に着目して同作を再読してみたい。というのも作中には語り手と相手の少年との恋愛を後押しする母親の存在が幾度となく描かれ、いわば家庭による同性愛の公認という傾向が読みとれるからである。またこの点について同じ問題に取り組んだアンドレ・ジッドとの親縁性も見逃せない。ジッドはエルバールを作家として引き立てた文学上の師であり、かたや後者は前者のアンガージュマンを手引きする懐刀的存在であった。同じ性的指向のもと同性愛文学の担い手でもあった二人は、当時「倒錯」と見なされた性愛のあり方と家庭という伝統的アソシエーションとの両立可能性をとともに模索していたふしがあり、そのことはエ

エルバルがジッドのホモペアレント的試みに参画していた事実のみならず、後者が『贗金づくり』で示した同性愛者への親権の委譲というヴィジョンを前者が『黄金時代』をはじめとする小説作品のなかで発展的に受け継いでいる点からもうかがうことができよう。

以上の文脈を踏まえつつ本稿では、同性愛者の政治的闘士として〈公〉と〈私〉の相剋を身をもって経験してきた作家が、同性愛と家庭という歴史的に見ても対立的な価値にどう向き合ったかを、その代表作を手掛かりに検討していきたいと思う。

『黄金時代』—— 同性愛文学としてのインパクト

『黄金時代』は1951年初頭から執筆され、その後大幅な改稿を経て、翌々年の5月にガリマール社より刊行された。作家にとってこの時期——1940年代末から1950年代以降——は、闘士・ジャーナリストとしての活動をやめ、文学作品の執筆に専心しようとする時期であり、私生活においては後ろ盾であったジッドの死（1951年）、金銭問題に発する生活の困窮（母親の介護と兄の息子の扶養）、妻エリザベートとの不和といった相次ぐ危機に見舞われた受難の時代でもある¹⁾。そうした文学への復帰／精神的・経済的危機の最中に書かれたのが『黄金時代』であり、まさしくエルバルにとっては文学者／生活者としての起死回生の一作であったといえるだろう（しかも彼はガストン・ガリマールに病床の母親に出来あがった本を見せたいという理由で出版時期を早めるよう要請しており、結局は母親の死去により叶わなかったこの望みからすれば、同作は実の母親に捧げられた一作でもある²⁾）。

同時代の評価としては、毀誉相半ばするところがあった。エルバルはジッドの一周忌に合わせて『アンドレ・ジッドを求めて *À la recherche d'André Gide*』(1952年)というエッセイを大々的な宣伝のもと上梓したが、そこで身内の側から大作家の偽らざる実像を呵責なく描き出したことが祟り、一部のジッド崇拜者から厳しく非難されていた。次作に当たる『黄金時代』もまたひきつづき「裏切り者の著作」として非難の的となったが³⁾、他方で同時代の重要な作家から好評価を受けたことも事実である。たとえばエルバルと親交があり、反体制のジャーナリストとして立場を同じくしていたアルベール・カミュは、青春をごく率直に「無垢な」かたちで提示するという『黄金時代』の類まれな特性を評価し、「破廉恥」とは無縁の「愛の歓び」と結びついた真の「純粋性」を体現した著作、あるいは「悲劇」を基調とし

ながら「光」や「生の恵み」を手放さぬ「美しい物語」と規定したうえで、一部の「汚れなき」読者に同書を薦めている⁴⁾。プロヴァンスや南イタリアをめぐる物語とカミュに馴染みの地中海文化との親縁性は作品そのもののマイナー性の指摘とともに頷けるところが大きい、それよりも注目すべきは、カミュが青春ものとしてだけではなく、「少年〔たちへの〕愛」の物語として同作の希少価値を認め、そのことを「純粋性」の根拠にしている点であろう⁵⁾。その論旨はつづくミシェル・トゥルニエの書評と通ずるところがある。トゥルニエは『黄金時代』のうちに「とりわけ評判の悪いエロティシズム〔＝男性同性愛〕の一形式を自然に語る」という傾向を見出し、この傾向が弁護・挑発から自然な語りへとという当時の同性愛言説の語り口の変化を映し出していると指摘する。具体的には、男色擁護の戦闘的著作であるジッドの『コリドン』（1924年）やカトリックの神学校を舞台に少年たちの禁忌の愛を耽美的に描くロジェ・ペールフィットの『特別な友情』（1944年）とは一線を画すというわけである。自然さや無垢の価値を認めるところはカミュと同様だが、トゥルニエの慧眼は、そういった美点をジャンル（史）の趨勢と対照させて評価している点にあり、じじつ作品が醸し出す「無垢な印象」の原因を「悲痛さ、危機、内的ないし外的な葛藤の欠如」、つまりそれ以前の同性愛文学にありがちな同性愛に由来する悲劇性、原罪意識、摩擦の不在に求めている⁶⁾。

同性愛文学研究の泰斗で自身も実作者のドミニク・フェルナンデスは、さらに突っ込んでより具体的かもしれない。同時代の読者であった彼は、同性愛文学史を私的な読書遍歴と重ね合わせていくなかで、1953年発表の、マルセル・ゲルサン『ジャン＝ポール *Jean-Paul*』とエルバールの『黄金時代』を画期的著作と見なしている。とくに「無垢と陽気の色合いを帯びた」後者は1950年代当時の同性愛をめぐる言説になかった「快活で幸福な同性愛者」像を初めて提示し、つづく1970年代の同性愛文学の陰鬱なヴィジョン——「恥としくじりと自殺の連縛＝繰り返し」——に取って代わるべき「歡喜の歌」を歌いあげたと称賛する。その語り口は「劇化もなければタブーに挑むという感じもな」いもので、作中には監視的な「他者の眼差し」もなければ抑圧の審級もなく、ただ欲望が「まったく自然で、弁解を要しないもの」として提示されており、つまり作者は「欲望を語り、書く」という1953年当時において「最も欠けていたもの」を「驚くべき簡素さ」でやってのけたのだという⁷⁾。

以上の同時代評から浮き彫りになるのは『黄金時代』の同性愛文学として

の価値とエルバールの同性愛観の清新さにほかならないが、他方でそれらがある程度作者の意図するところであったことも見逃してはなるまい。草稿から作品の成立過程に迫った伝記作者のジャン＝リュック・モローによれば、当初エルバールはジッドの『コリドン』のような「論 traité」の形式で作品を書こうとしていたという。しかもその「論」の草稿では男性同性愛が二つに大別されており、互いの性向を自然に認め互いを束縛しない関係としての同性愛が、「ソドミー」や「売春」と同一視される「悪の同性愛」に対置されていた。注目すべきは前者を自分のものとして採用する作者が、後者を否定しざる際、ブルーストやジュネを例にとりつつ、同性愛を「悪徳」として神聖視する傾向をはっきりと批判している点である。モローはこの傾向への対抗として『黄金時代』に「輝かしい思い出」のなかの同性愛が組み込まれたとしているが、この指摘は同性愛文学史における作品と作家の位置づけを考えるうえで重要かもしれない⁸⁾。同性愛をアウトローとして——フェルナンデスの言葉を借りれば「パリア賤民の栄光」のもとに⁹⁾——捉えるスタンスと意識的に手を切り、別のあり方を志向していたことを意味するからである。そこには——トゥルニエは峻別していたものの——ジッドとの親近性が否応なく認められる。つまり同性愛＝自然という命題を打ち出し、ギリシャ的友愛を範とし、同性愛者の社会的統合を模索した作家のヴィジョンが発展したかたちで見出せるということなのだが、次にそういった新たな志向が『黄金時代』のうちにどのように表れているかを具体的に見ていくことにしよう。

同性愛と母親の表象

『黄金時代』は十一の章から構成されている。「十六歳のころ、僕は女の子が好きだった。[……] そうした日々は、向こうの快樂とこちらの快樂が似通っていないことに僕が気づくまでつづいた」¹⁰⁾と始まる序章は、異性愛の気づきから、それを解消するアランという後輩の少年との「幸福な出会い」、彼と過ごす地元ノールでのヴァカンスの日々、愛の告白、そして別れの経緯までが語られる。つづく章はこの少年のイメージに取り憑かれた語り手の今に至るまでの放浪の旅を追いかけていく流れになるが、じじつパリ、アルザス、プロヴァンス、ナポリ、コルシカなどの土地を経めぐるなかで、兵士の見習い、船乗りの息子、農家の少年、サーカス芸人、漁師、ロシアのバラライカ弾きといった七人余りとの交際が赤裸々かつ断章的に描かれている。

彼らはいずれも社会の下層や周縁に暮らす少年たちであり、その交際は強

烈でありながら慎み深く、時に悲痛なほど不器用で、性愛にかんしても垣間見や軽い愛撫を基調とした自然で過剰を排したものとなっている。その意味で他の作品でも確認できるエルバールの男性の「タイプ」と「セクシュアリティ」のあり方に沿っているわけだが¹¹⁾、我々がここで注目したいのは、そうした少年たちの関係性に寄り添う母親の存在にはかならない。この点は幾人かの論者が指摘するところである。エルバールと親交のあった作家で批評家のジャック・ブレネールはその一人だが、彼は『黄金時代』における父親の不在と母親の役割の重要性に注目し、その理由を、作品が体现する「自由で無邪気なほど率直で無教養な」世界は「都市やブルジョワ教育を受けた界限」では成り立ちにくいから、としている¹²⁾。つまり少年たちの出自の周縁性と物語の舞台のそれは重なっており、ブルジョワ的家父長制の原型に沿わないそうしたマージナルな環境が「黄金時代」と呼ばれる作品世界の成立を条件づけているというのだが、この論理に「同性愛」という文言をはっきり付け加えたのがフィリップ・ベルティエである。最初のまとまったエルバール研究の著者であるベルティエは、作品のうちに母親が息子の同性愛を手助けする傾向——「母親の共謀」——を読み出し、そこに同性愛と家庭の両立、前者によって後者が存続可能となる機制があることを指摘した。『黄金時代』においては母親と息子はいわば男女のカップルであり、前者が第三の男に後者を預けることでその構図は維持される。つまり彼女にとって息子の同性愛は他の女性を寄せつけぬために都合がよく、そこでは母親が排除されているように見えながら実は母-息子の絆が強化されているというのである¹³⁾。いささか精神分析的すぎる——エディプス以前の母親との固着的関係に依拠しすぎの——読みだが、それでも母親が未成年の息子を年長の男性に託すという行為の意味合いを同性愛と家族（母親）の共謀という視点で捉えたところに重要な問題提起があるだろう。

じっさい『黄金時代』の節目節目に登場する母親（たち）は、二つの面を併せもっているように見える。小うるさいやや抑圧的な面と、息子たちを容認する寛容な面のことだが、まず語り手とアランの母親たちが該当するだろう。彼らがヴァカンスの間に急いで関係性を築き上げていくなかで、彼女らの態度も一方から他方へと次のように変化していく。

九月が過ぎていくにつれ、鈍い苦しみが押し寄せてくるのがわかった。あと三週間経てば、もう二週間もすれば、はなればなれにならなければならない。そのことを思うと、時に一種のパニックに襲われた。母

親の叱責にもかかわらず、アランは毎夜あずまやに寝にきた。僕にはちゃんとわかっていた、こちらにぴったり身を寄せて、じっと目を開けたまま、向こうもずっと眠れずに苦しんでいることが。[…]

最後のころは、烈しい風が立ち、黒い雲が吹き払われた。秋分の大潮の時期に入ろうとしていた。僕らがあずまやで寝ていることは、それぞれの家族の目には、たいそう奇異に映るようになっていた。母親たちは僕らの機嫌を損ねてはまずいと感じたのだろう。僕の母などは、二枚の毛布が入った袋を黙って渡してきてただけだった¹⁴⁾。

息子たちの同性愛を「母親」を代表とする「家族」がどう捉えているかが示されている箇所だが、それが「叱責」されるべき「奇異」と見なされていることから、エルバールにしては珍しい同性愛タブーへの言及といえるかもしれない。ただここで注目すべきは、母親らが当初のそうした抑圧の態度を和らげ、黙認ないし後援するようになるという事実であり、とりわけ「二枚の毛布が入った袋を黙って渡す」という行為は同衾の承認として象徴的な意味合いをもつだろう。同じような母-息子の図式は、語り手の初めての「情事」においても現れる。パリからノールへと帰る列車内で自分と同じ年恰好の兵士と邂逅した彼は、事後、兵士の地元の駅で降り、その実家に一夜の宿を借りることになる。

「君をベッドの兄弟って紹介するからね」

「何だい、ベッドの兄弟って？」

「兵舎の大部屋で、隣で眠る奴のことさ」

「だけど誰が見たって僕は兵士なんかじゃ……」

「正式な外出許可が出なかったから、平服を着たってことにしよう」

部屋では、母親が息子を待っていた。僕らはブーダンと林檎のコンポートを夜食にとった。その後、末の子供を目覚めさせ、部屋の奥まで引きずってきた簡易ベッドにその子を寝かせなければならず、かたや母親は僕ら二人の旅行者のためのベッドメイクをやり直していた。小僧が僕に強い興味を示してきた。黒い目が好奇心で輝いているのがわかった。母親は息子に足を洗うよううるさく言った。

「どんなかわかるでしょ、男の子ってやつが！ いつだって汚くて、ぞっとさせられるわ。あなただってそうですよ、金髪のものっぽさん、足を洗わなきゃ駄目よ！」

彼女はこちらの作業に立ち会い、うまくできたかを確かめた。

「さあ、寝なさいよ」引き下がりながら彼女は言った。「あと、馬鹿なことすんじやないよ！」¹⁵⁾

ここでの「ベッドの兄弟」という隠語は両義的で意味深い。なぜならゆきずりの相手を母親の目から誤魔化すための符丁でありながら、文字どおり捉えれば、アランとの関係を原型にした、エルバールにおける同性愛的友情の内実を言い当てているからである。また、母親が監視・禁止の審級でありながら二人のために「ベッドメイク」しているところも二価的で、先述したエルバールの母親の二つの面を見事に表していよう。先ほどのシーンと異なり、今度は友人の母親が息子の友人である語り手に働きかける格好になっているが、こうした他人どうしの母-息子の交流は最初の同性愛の相手であるアランをめぐるでも起こる。「M村に行こう、きっと〔アランの〕母親に歓迎してもらえる」と決心して帰郷を果たす語り手だったが、そこでアランの姉から少年の死とその母親の悲しみを伝え聞くことになる——「人生のうちでこうしたかたちの苦しみを経験したことは二、三度しかない。それは人を走りまわらせ、拳骨で家具を何度も殴らせたりするような苦しみであり、そこから逃れるには、酒を飲むか、不意に襲ってくる不可解な眠りに身を委ねるしかない。死者を悼むよりもつらいことがある、それは皆に悼まれている死者を憐れむことだ。母親の苦しみというのはこの種のものと僕は想像する」¹⁶⁾。

友人の母親と息子の友人（＝語り手）とのこうした相互的關係は、『黄金時代』において、実の母-息子のそれよりも特権的なものに思える。船乗りの息子であるペトロールとの交際では、母親が語り手に川船の舵を取らせるばかりか——「『明日の朝は、四時に出発だよ。舵をとるのはあなただからね』と彼女は僕に宛てて付け加えた」¹⁷⁾——、彼を家族の一員として迎え入れようとする。息子の積極的な取りなしにより「養子」に取ろうという計画まで持ち上がるが——「両親が僕をかいがいしい働き手と見なし、息子によい影響を与えてくれると期待していたから、彼はそういう両親に僕を養子として引きとってもらえるよう手を尽くしていたのだ」¹⁸⁾——、突然の事件によりそれも立ち消えになってしまう。不正行為に手を染め、税関吏に暴力を振るおうとするペトロールを、語り手は必死に止めようとするが、手錠のかかった拳で逆に殴られ、次のような愁嘆場に逢着する。

「見あげたもんだ」母親が不機嫌そうに言った。「せいぜい泣くがいいさ、けだものが！ 親に恥をかかせるだけじゃ足りないから、一番の親友を殴りつけたってんだろ……。だけど今度という今度は、許すわけにはいかないよ。父さんもあたしも、おまえの素行の悪さにはもううんざりだ。父さんが帰ってきたらはっきりするよ——荷物をまとめる用意をしとくがいいさ！」

彼女の顔つきは厳しく、敵意がこもっていた。ペトロールとはいえば、きつと話が聞こえていなかったにちがいない。頭を腕にすりつけ、本気の叫びが胸から漏れていた。

「彼と二人っきりにさせてください」僕は母親に頼んだ。「話をしてみたいんです」

「まったく冴えてるよ」彼女は不満げにつぶやいた。「あんなのを許してやるなんてね！」

とは言いながら、扉をばたんと閉めて出ていってくれた¹⁹⁾。

母親が息子たちを叱りながらも二人の間に立ち入らず見守るところはこれまでと共通するが、息子を咎める際に「親友」を傷つけたことの罪を重大視している点が興味深い。実の息子よりも息子の友人に配慮する態度と、後者を「家族」として扱い「養子」に迎え入れようとする姿勢は、後のマチューという少年とその母親との交際を予示するものであり、そこに至って息子たちの同性愛に対する母親の向き合い方がはっきりと表象されることになるだろう。

公認と親権の移譲

ベルティエは「母親の共謀」の例として毛布を手渡した語り手の母親、ジョルダノー夫人、さらに『力線 *La Ligne de force*』（1958年）に登場する「N」というロシア青年の母親を挙げているが、後の二人は我々にとっても重要な人物像となろう。まずジョルダノー夫人だが、彼女は、作中アランと並んで最もページを割かれている少年マチューの母親である。南仏のとある村に漂着した語り手は、ある日村を訪れた芸人のショーの客席に、「ブロンドの髪にブルーの少し吊りあがった目、笑うと絶えずまくれあがる、肉づきのよい口をもった〔…〕おそらく十四歳ぐらいの」少年を発見し²⁰⁾、ショーの後の福引大会で、自分がもらうはずだった賞品のガチョウを彼に譲り渡

す。感激した「マチュー」と呼ばれる少年は、翌日、語り手の逗留する宿屋まで礼を言いに来、母親からの言伝だとして、家へ夕食を食べに来よう誘う。客人を「恩人」として迎えたジョルダノー夫人は、「全身黒ずくめで[…]、息子と同じく澄んだ目をしており、その顔からは善良さと奉仕の欲求がにじみ出ているが、当初の予想と違って「寡婦ではなく、別居中の身で、夫は他の場所で暮らすとって出ていったきり」だという²¹⁾。歓待の途中、感極まった彼女は、次のような提案をする。

「つまるところ、どんなにこの子があなたを愛しているか、おわかりに
なれないでしょう！」息子を指さしながら彼女が言ってきた。

マチューは持ち前の感じのよい笑顔で微笑み、少し透きとおった鼻孔の両側にえくぼを二つ浮かべていた。愛しているということが母親をと
おして僕に伝わったので、とても嬉しがっていた。二人きりになった隙
を突いて、こちらの手を掴んできた。

「もうすぐ僕らと一緒に住むことになるんですよ」彼はひそひそ声で
言った。「^{ウイ}諾と行ってくださいね！　ここがあなたの部屋になる予定で
す。後でママンのほうからお伺いを立てますから……」

供するのがガチョウだけでは品に欠けると思ったのか、ジョルダノー
夫人はすでに追加の皿を出していた、オードブルやら、鱈料理やら
……。マチューと僕の給仕をしつつ、自分の分は台所で食べ、息子から
の「無作法」があったら絶対に承知しないでくれと釘を刺してきた——
「びんたしてやってください、いい子じゃなかったら！」²²⁾

息子ともども語り手を家庭のうちへ招き入れようとする姿勢は、ペトロ
ールの母親のその再演にほかならないが、ここで注目すべきは、年上の友人
である彼に明らかに教育的役割が充てがわれている点である。ベルティエ
は、息子の同性愛を支援する母親の心のうちには息子を「夫の代わり」と見
なし、自分自身とのカップル関係を維持しようとする魂胆があると指摘し
た。つまり息子を他の女性の元に行かせず、ひたすら自分の手元に置こうと
する心性をいうのだが、それよりもまずここでは、母親による親権の部分的
移譲とギリシャ的少年愛——年長の男性と未成年の間の教育的絆を基にした
性愛——の公認を見るべきだろう。というのも、やがて彼女は息子と語り手
の関係が「愛」を含んだものであることを知り、事後になって——つまりマ
チューの事故死の後になって——、その関係を追認し、残された者を二重の

意味で許すからである。

埋葬の一時間後、僕の部屋の前で、すさまじい嗚咽が沸き起こった。彼女だった。僕の足元に崩れ落ち、猛烈な勢いで脚にからみついてくる。「許して！」彼女はそう叫んでいた。「許してちょうだい！ あの子を殺したのは私なのよ！」

やがて僕に抱き起こされると、彼女は叫び声の合間にこう告白した、土曜日、隣家の女からの忠告に不安をおぼえて、危うくマチューに僕と会うのを控えるよう言いそうになったのだ、と。

「なんて馬鹿な私！」一種の激情に駆られて彼女は繰り返した。「なんて馬鹿な私！ あなたとあの子が互いに愛しあっているのを、まるで知らなかったかのように！ 許してちょうだい、私のせいなの……罰が当たったんだわ！」²³⁾

語り手は事故の原因となったオートバイを少年に贈ったことを悔やみ、愛する存在を殺してしまったと苦しんでいたが、対する母親は積極的な自責の引き受けによって相手を免責する。世間（「隣家の女」）から指弾されるべき同性愛を免罪するというだけでなく、息子たちの恋愛関係を百も承知であったにもかかわらずその仲を割こうとしたことを己が罪としているのであり、事故の原因に同性愛への抑圧が暗に結びつけられているのである。

同性愛をタブー視しないエルバールの姿勢がこうした母親の振る舞い——親権の象徴的移譲、同性愛の無罪化あるいは抑圧の否定——によって裏づけられているわけだが、同じような構図は、作品間の垣根を超えて確認できる。『黄金時代』の五年後に発表された『力線』では、共産黨員としてソ連を訪れたエルバールが、とある地で「N」という青年と出会い、恋に落ちる。反ソドミー法を擁する国家の魔手からこの恋人を守るため、二人の関係は秘密にされ、語り手はつねに彼をイニシャルで呼称することになるのだが、こういった抑圧へのしたたかな抵抗に実は「N」自身の母親が関わってくる。引用は、父親が不在の家に息子二人と暮らす母親のもとを訪ねるシーンである。

「Nからあなたのことは聞いていますよ」と彼女は私に言った。「息子たちは私に何も隠し事をしないんです」そしてひとときの沈黙ののち、声をひそめて——「どうかお幸せに、ただし、くれぐれも慎重に。このあ

たりじゃ、外国人たちと付き合うのはあまりいい目で見られないんですよ……」

彼女はためらいがちに言った――

「モスクワのどこで逢引きなさるんですか？ 私が思うに、あなたのホテルでは……まずいでしょう。ところで私は一日じゅう家を空けていますし、ペティアも夕方にならないと帰ってきません。あの子をご紹介しますよ。いま隣で宿題をやっていますから」

ペティアは十歳だった。

「お名前はなんとおっしゃるんですか？」彼が尋ねてきた。

「ピエールだよ、君と同じさ」〔ペティアはピョートルの親称で、フランス語のピエールに当たる〕

「違うよ、僕が知りたいのはもう一つの名前」そして母親のほうを振り返って――「どうして知りたいかってね、学校で、親の友だち全員の名前を教えろって命令されてるからなんだ」

X夫人はなんとも美しい笑みを浮かべた――

「それはロシア人の友人のことをいっているんでしょ。でもピエールはフランス人なのよ。名前を知ることすら禁じられているの」

ペティアはうなずいた。明らかに彼は、禁止事項を守ることに喜びを感じていた。

私はいとまを告げた。X夫人が玄関のぐらついた^{ステップ}階段のところまでついてきた。そこで彼女は、私の両手をつかんできた。

「Nを失わないようにしてくださいね」彼女はささやいた。「あなたには理解できないでしょう。ほんの些細なことで……」²⁴⁾

息子と同じくイニシャル（「X夫人」）で呼称される母親が言いさしているところは、「ほんの些細なことで」の逮捕ないし粛清を暗示しているといいだろう。じじつ語り手は「N」との交際がばれ、彼が「人質」とされることを危惧するのだが、ここではそうした弾圧の恐怖（下の息子の告発的な振る舞い）と、被弾圧者らを密かに護ろうとする動きが二つながらに描かれている。特に後者が母親の言動によって体現されている点が重要だ。というのも彼女は息子たちの「幸せ」を祝福しつつ、二人の「逢引き」が安全な場所で行われているかどうかを懸念し、密会場＝「家」の提供を申し出ているからである。父親のいない家で母親が息子を年長の男性に委託し、彼らの同性愛を公認・後援するという『黄金時代』でも見られた図式が踏襲されてい

るが、さらに一步踏み込んでいて注目すべきなのは、彼女が国家による同性愛（者）の弾圧に反対し、一種のレジスタンスに間接的に参画している点であろう。論者のなかにはエルバールの同性愛は「戦闘的」でないとする向きもあるが²⁵⁾、同性の恋人を護ろうとする語り手と彼らの関係を手引きする母親の行動のうちには、まさに同性愛問題に対する作家のミリタントイスマの発現が認められるのである。

ジッドという参照点

ところで、エルバールにおける同性愛と母親・家庭の相関性を考えるうえで無視できぬ参照点がある。師匠筋で同じく性的周縁者であった作家のアンドレ・ジッドである。二人の交流は、1929年、エルバールがジャン・コクトーの招きで南仏に赴いた際、偶然その地を訪れていたジッドと邂逅したのが機縁となる。三十五歳年上の作家にとって若さと美貌と行動力を備えたこの青年は、自作『法王庁の抜け穴』の主人公ラフカディオの化身と映った。1931年に処女小説を刊行、続いてベルギー新印象派の画家テオ・ヴァン・リセルベルグとマリア——「小さな貴婦人」の異名を持つジッドの親友——の娘であるエリザベートと結婚するが、いずれもジッドの取りなしによるものである。特に後者は同性愛と家庭の両立を問題とする我々にとっても興味深い。というのもジッドは1920年ごろから、結婚という制度の外で子供を作りたいというエリザベートの希望を受けて、その母マリアとともに「新たなヒューマニティ」の創出を計画し、1923年に自らが生物学的父となってエリザベートとのあいだに一女をもうけているからである。これはジッドが同性愛者の自認をもったうえでの計画であり、また彼は婚外子を中心とする「家族」のうちに自らの愛人マルク・アレグレら同性愛的傾向をもつ友人を引き入れ、ともに集団的教育を行った。その意味で彼の「家庭」は「ホモペアレント性 homoparentalité」(＝「少なくとも一人の親が同性愛者の自覚をもつ家庭の状況」)の実現と言えるわけだが、ここで重要なのはこの新たな親権ないし家庭状況の試みにエルバールが二重の意味で関与しているという事実である。つまり彼は先述の結婚によって婚外子の義理の父親となり、同性愛（ないし両性愛）への指向を維持したまま、ジッド的「家庭」——血縁や父－母－子の三位一体を基調とした伝統的家庭とは異なるクィアのアソシエーション——に参画しているということになる（さらに言えば、ジッドの試みをなぞるかのように、生後間もなく亡くなってはいるが、エリザベート

とのあいだにジャンという息子をもうけている)²⁶⁾。

以上の伝記的事実は同性愛と家庭の両立をエルバルが実際に志向していたことだけでなく、そこにジッドの影響があったことの証左でもあろう。では、作品・思想における関連はどうか。ジッドとエルバルのファミリー・ロマンス関係性を論じたカトリーヌ・ドゥズーは、両者に共通するテーマとして「家族小説」「少年愛」「自己のエクリチュール」の三つを挙げた。二人の絆は曖昧で、作風・文体もかなり対照的でありながら、ともに年若い男性を欲望・性愛の対象とし、そういったマージナルな自我の自伝的エクリチュールをものするところに共通性があるというのだが、慧眼なのは家族への執着と幻想があることを指摘している点だ。ドゥズーによれば、エルバル作品において母親は「自然」と同一視され、「ジッドと同じく」この母親によって男どうしの愛が無罪化されるのであり、だからこそ彼は作中で同性愛を告白したり正当したりする必要がないのだという²⁷⁾。同性愛が罪の意識になっておらず、「性のエクリチュール」が告白・贖罪のトポスになっていない点はエルバルの特質であり、これは同性愛行為を作家の一人称で告白した『一粒の麦死なずば』(1926年)のジッドとの対照点なのだが、それでも母親が息子たちの同性愛を自然化するという傾向が両者に共通することを挙げているのが興味深い。じっさいジッドの『贖金づくり』にはこの傾向がうかがえる。主人公で小説家のエドゥワールと彼の愛する少年オリヴィエ、そして前者の妹で後者の母親であるポーリーヌの関係性においてである。

オリヴィエがあなたの家にいることを知って、それだけで私は安心しているの。[……] あなた以上にあの子の世話を私はしてやれないでしょう。だって、あなたが私と同じくらいあの子を愛しているということを、私はよくわかっているから [……] どんなによく護られているように見えても、男の子の純潔がいかに一時的なものであるかが、よくわかったわ。それに、最も純潔な青年が後になって最良の夫になるとも思えないしね。[……] 結局のところ、父親の例を見てきたせいで、私は息子たちに違う美德をもってほしいと望むようになったわ。とはいっても、息子たちが放蕩にふけったり、下劣な関係をもったりしないか、心配はしているの。オリヴィエはすぐに自制心を失くしてしまう子でね。どうかあなたがあの子を引き留めてやってください。あなたなら、あの子のためになれると思うの。あなたにしかなついでないんだから²⁸⁾ ……。

ここで言われているのは、母親が息子の教育を父親代わりの伯父に委託するというだけではない。彼女はエドゥワールが少年に愛情を抱いていることを承知のうえで、二人の関係を実母の立場から公認するのであり、そこでの関係とは、エドゥワールが作者の分身的人物であるかぎりにおいて、年長者と年少者のあいだの性愛の混じった教育的絆、すなわち一方が他方に男性・市民としてのイニシエーションを施すというギリシャ的少年愛のそれにほかならない。じっさいジッドは友人の宣教師の息子であるマルク・アレグレと少年愛の絆を結んだ際、後者の実母シュザンヌからこう言われている——「あなたのような男のひとが、筆やことばによって、今の若者にしてあげられることを思うと、私は身のうちで燃えさかっている熱い炎であなたを満たしたくなるのです。あなたがその炎を私の息子たちに伝えてくださると。私にはそれができなかつたのですから」²⁹⁾。ここにも実母から代父への一種の親権の委譲が暗示されているわけだが、半ば「おじ」としてアレグレ家の末っ子の教育を両親から委託されたジッドは、そうしたマルクとの擬似父子的関係を『田園交響楽』の牧師と実の息子ジャックとの関係に昇華させてもいる。少年愛の相手との関係を血縁と同等の親子関係として捉え直す趨勢は、同性愛というマージナルな性愛を家庭という既存の制度のうちに統合し、また両者を宥和させる試みと捉えられ、先に見たようなエルバル作品における同性愛と家庭の両立傾向と多分に重なるのである。

結論にかえて

以上、エルバルにおける同性愛と家庭の関係性を同性愛文学というジャンルに連なる『黄金時代』を中心とした作品の読解をつうじて論じてきた。そこに見られた両者の互惠の関係——家庭の代表としての母親による息子らの同性愛の公認、息子の友人の家庭への引き入れ、同性愛者である彼への実の息子の教育の委託ないし親権の象徴的な委譲——は、同性愛（者）の家庭への再統合とそれによる家庭概念の刷新の可能性を示している点において、多分にホモペアレント的の主題を含意しており、そこには実人生と作品の双方において同主題を提示した先達であるジッドとの新たな親和性が垣間見えた。

ところで、我々は件の主題にかんしてジッドとエルバルの共通性を強調したが、むしろ同性愛の様式において、彼らに少なからぬ相違があることは否めない。ジッドとエルバルが異なるのは、前者が同性愛を市民社会の制

度に組み込んでいたギリシャをもっぱらの範にしている点であり、じっさい家庭の組み込みの対象にされているのは年長者^{エラステス}／年少者^{エロメノス}のカップル——ジッド／マルク、エドゥワール／オリヴィエ——のみである。つまり年長者の優位と権力差が前提になっているのであり、二人の対等な愛・相互的な快楽の交流が前面に描かれることはほとんどない。まさにその点こそエルバールが『アンドレ・ジッドを求めて』において指摘した点であり、そこでは師である作家の（ホモ）セクシュアリティのあり方が「失望〔させる・させられること〕への恐れ」³⁰⁾という人格的特質から批判的に検討されている。同書によれば、ジッドが少年たちに求めるのは、肉欲の交わりのみの手っ取り早い享楽とゆきずりの関係にほかならず、そうした「^{フレジュール}喜び」の手前にとどまる態度——「^{ヴィリテ}喜びに先立たれること」の拒否——もまた、失望への恐怖に由来する予防線なのであり、そうした原理が第一に来るがゆえに、彼の同性愛には「責任の感覚と要請」の欠如——「^{ヴィリテ}男性性の欠如」——が顕著に認められるという³¹⁾。エルバールはこの欠如を、マルクとの駆け落ちの際、ジッドが妻マドレーヌの苦しみよりも自分の苦しみ、すなわち彼女から妻や母としての人生を奪ったことよりも欺いたことじたいに自責の念を感じていたという事実のうちにも見ている³²⁾。ここでジッドの同性愛を「母親」の否定として捉えている点は注目すべきだろう。少年の母親を同性愛の共謀に引き入れることはできても、なお「母親というもの」への不敬が拭いきれていないということか。またエルバールは先に挙げた『贖金づくり』にかんして、ジッドの分身であるエドゥワールが、自殺未遂したオリヴィエを介抱しながらも自身が警察の捜査に身を晒すのを恐れて、医者呼びにやらせていた女中を呼び戻したことを「エゴイズム」の発露と断じてもいる³³⁾。

ベルティエも指摘しているように、エルバールの同性愛はこうしたジッドの一方的で非相互的なそれ——「幼児性」「ぞんざいでゆきずりの情欲」「交流の拒否」——への批判から成り立ち、その対照として二人での「生の共有」や「信頼に照らされかつ包まれた結束の契り」を前面化する傾向が確かに認められるが³⁴⁾、少なくとも非連帯者の連帯とその社会化という観点においてはジッドの問題意識を多分に継いでおり³⁵⁾、とりわけ家庭との紐付けによって同性愛者の社会統合の道を探ったところに師のヴィジョンの継承が見受けられるといえるだろう。

注

- 1) エルバールの伝記的記述についてはジャン＝リュック・モローの伝記 (Jean-Luc Moreau, *Pierre Herbart : l'orgueil du dépouillement*, Grasset, 2014) を参照した。
- 2) *Ibid.*, p. 479.
- 3) *Ibid.*, pp. 480-482.
- 4) Albert Camus, la note de l'Âge d'or, in *Bulletin de la NRF*, n° 70, juin 1953, p. 3 ; repris dans Pierre Herbart, *L'Âge d'or*, Gallimard, coll. « Le Cabinet des Lettrés », 2001, pp. 9-10. このテキストは『黄金時代』出版時に「書評掲載依頼状 prière d'insérer」として書かれた。エルバールは十三歳年下のこの作家が主宰する『戦闘 *Combat*』紙に多くの論説を寄稿しており、レジスタンスを引き継いだ戦後体制を批判しつつ戦後もなお反体制を貫くという意味で、ジャーナリストとしての立場を同じくしていた。
- 5) *Ibid.*, p. 9. 「ここにあるのは愛の^{プレジュール}欲びである。少なくとも読者は問題とされているのが少年愛 amour des garçons で、それが率直に語られていること知るはずだ。しかしこの愛は、うぬぼれも気取りもなく喚起されているのであり、そのことが最終的にこの愛を、我らが巷間の舞台が飽くなき観客たちに向けて絶えず語っているところの破廉恥よりも尊敬すべきものにしてしているのである。したがって本書に望まれるのは、我々の世界において、愛の事象への対位旋律として使われるあの冷笑によって汚されすぎないでほしいということなのだ。純粹さという語は用心しなければならない語である (「ユマニスム」という語と同じくらいに)。しかし、欲びの純粹さとうまく結びついているとき、まだこの語を使うことができる。だからこそ次のように言うことが許されるだろう、『黄金時代』は、汚れなき手巾にしか置かれてほしくない、純粹な著作である」と。文中での「我々」には明らかに異性愛の世界という含みがある。
- 6) Michel Tournier, « Pierre Herbart, *L'Âge d'or* » (« La Rubrique du mois »), in *La Table Ronde*, n° 70, octobre 1953, Plon, pp. 149-150.
- 7) Dominique Fernandez, « Une élégance désespérée (Pierre Herbart) », dans *Amants d'Apollon : l'homosexualité dans la culture*, Grasset, 2015, pp. 451. ここで1970年代の「陰鬱な」同性愛文学の例として挙げられているのは、『ヴェニスに死す』(マン)、『感情の混乱』(ツヴァイク)、『金縁眼鏡』(ジョルジョ・パッサーニ)の三作である。
- 8) Moreau, *Pierre Herbart : l'orgueil du dépouillement*, pp. 488-489.
- 9) Fernandez, *Le Rapt de Ganyèmède*, Grasset, 1989, pp. 291-294. 同名の小説(邦題は『除け者の栄光』)をものしたフェルナンデスは、この種の「栄光」、すなわち「追放された者を偉大にする闇の光輝」こそ、自らの創作の主題であり、またオスカー・ワイルドからパゾリーニに至るまでの同性愛像 (「罪悪感に苛まれている同性愛者、危険と背中合わせに生きたい、罰を自らの頭上に引き寄せたいと欲しつつ、罰が目前に現れれば進んでそれを受け入れる同性愛者」) につきまとうものとしている。
- 10) *L'Âge d'or*, p. 13.
- 11) この点については以下を参照。Philippe Berthier, *Pierre Herbart, morale et style de la désinvolture*, Centre d'études gidiennes, 1998, p. 42, pp. 84-86.
- 12) Jacques Brenner, *Histoire de la littérature française de 1940 à nos jours*, Fayard, 1978, pp. 139-143.

- 13) Berthier, *Pierre Herbart, morale et style de la désinvolture*, pp. 75-76 ;
« Féminaire », in *ROMAN 20-50*, hors série n° 3, Presses Universitaires du Septentrion,
décembre 2006, p. 44.
- 14) *L'Âge d'or*, p. 18, p. 23.
- 15) *Ibid.*, pp. 41-42.
- 16) *Ibid.*, pp. 44-45.
- 17) *Ibid.*, p. 60.
- 18) *Ibid.*, p. 56.
- 19) *Ibid.*, pp. 62-63.
- 20) *Ibid.*, p. 100.
- 21) *Ibid.*, p. 103.
- 22) *Ibid.*, pp. 104-105.
- 23) *Ibid.*, p. 139.
- 24) Herbart, *La Ligne de force*, Gallimard, coll. « L'Imaginaire », 2011, pp. 110-111.
- 25) Berthier, *Pierre Herbart, morale et style de la désinvolture*, p. 88.
- 26) ジッドとこうした新たな家庭のあり方については、次の拙稿において詳しく論じた
ところである。「アンドレ・ジッドと『ホモベアレント性』」、『早稲田大学大学院文学
研究科紀要』、第64輯、第2分冊、早稲田大学文学研究科、2019年、pp. 245-258。エ
ルバールの実子にかんしては以下を参照。Moreau, *Pierre Herbart : l'orgueil du
dépouillement*, pp. 163-165.
- 27) Cathrine Douzou, « Pierre Herbart et André Gide, écritures d'un soi marginal », in
Études littéraires, vol. 36, n° 3, Presses de l'Université Laval, 2005, pp. 125-130.
- 28) *Les Faux-monnayeurs*, in *Romans et Récits. Œuvres lyriques et dramatiques*, vol.
2, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2009, p. 409-410。『贋金づくり』をはじめと
したジッド作品におけるホモベアレント的の主題ないし親権の委譲のテーマについて
は、拙稿を参照のこと。「アンドレ・ジッドと『ホモベアレント性』」、pp. 252-254.
- 29) Lettre du 14 janvier 1923 citée dans Lestringant, *André Gide l'inquisiteur*, vol. 2,
Flammarion, 2011, p. 174.
- 30) Herbart, *À la recherche d'André Gide*, Gallimard, coll. « Le Cabinet des Lettrés »,
2000, p. 26.
- 31) *Ibid.*, p. 40.
- 32) *Ibid.*, pp. 37-39.
- 33) *Ibid.*, pp. 57-59.
- 34) Berthier, *Pierre Herbart, morale et style de la désinvolture*, pp. 86-87.
- 35) この問題意識については拙稿を参照。「アンドレ・ジッドと『ホモベアレント性』」、
pp. 254-255.